●特別寄稿

「人文知の未来」（講演概要）

吉田　敦彦（学習院大学文学部教授）

「人文知の未来」を考えるに当たって、まず一つの手掛かりとして、その一つの分野である神話の研究が、私自身がそれに手を染めた当時から現在まで、半世紀足らずのあいだに、どれほど大きな――コペルニクス的というか、天動説が地動説に変わったのとも匹敵するほどの――変化をしたかということから、話を始めさせていただくことにする。今から四十何年か前に大学院の学生だった私が、神話に学問的興味を持つようになり、当時神話研究についてもっとも権威のあるものと考えられていた文献を、夢中で耽読することで学んだ神話観は、十九世紀後半から二十世紀の前半にかけて、タイラーやフレーザーらによって代表される、主として英国の人類学者たちの非常に浩瀚な研究によって構築されたものだった。その出発点の発想は、一言で言えば、「未開人」と当時呼ばれていた、文字を持たぬ民族の宗教あるいは文化を研究することで、人類の宗教・文化のもっとも原初的な形を知ることができるという考え方だった。その発想に基づいて神話の研究も行われ、その結果、神話は一方では、人類が現在のような知的水準に達するより以前の未開で野蛮で蒙昧で、幼稚な考え方しかできなかった時代に、その未開で野蛮で蒙昧だった人々の幼稚な頭脳により生み出されたもので、荒唐無稽で筋も支離滅裂な、意味も論理もない話と考えられていた。たとえばドイツの高名な民族学者だったプロイスという人は、一九〇四、五年に出版された *Der Ursprung der Religion und Kunst* という、名著とされた本の中で、神話は *Urdummheit*（原初の痴愚）だと言い切っていた。

しかも他方では、そのような *Urdummheit* にすぎないとされた神話も、人類の文化の発達の過程の中で、もっとも未開で野蛮だった時期からあったものではないと考えられていた。なぜなら *Urdummheit* であっても、神話の中にはともかく、物語の主人公になりえるような、擬人化された神々が主人公として出てくる。そしてそのような擬人化された神々に対する信仰、つまり神話の発生の基盤となる多神教的な宗教は、人類の宗教のもっとも原始的な形ではなく、文化がある段階まで進んではじめて発生すると考えられていたからだ。

神話を持つようになる以前には人間は、当時の学者たちがメラネシア語を学術用語として取り入れて、「マナ」と呼んでいた、漠然とした非人格的な力の存在を信じ、畏怖の感情をもってその「マナ」を崇める一方で、その力を自分に有利に働かせようとして、呪術を行っていたと考えられた。そしてこのようなマナの信仰とそれに働きかけるために行われる呪術が、人類の文化のもっとも原始的な段階では、宗教に代わるものとして存在したと見なし、当時の学者たちはそれを、「ダイナミズム」（物力崇拝）とか、「前アニミズム」と呼んでいた。そしてその「前アニミズム」の段階から、文化と知能がやや発達すると、タイラーが *minimum definition of religion* であるとした *belief in spiritual beings* 霊魂や精霊に対する信仰が発生してタイラーがもっとも原始的な宗教と見なしたアニミズムの段階に移行する。次にそれらの *spiritual beings* が、擬人化されることではじめて多神教の神々とその活動を物語る神話が発生することになると考えられた。

つまり神話は一方で、きわめて未開で野蛮な、深い意味などあるはずのない *Urdummheit* に過ぎぬ神話すらまだ持ちえぬ人類の文化の段階があって、その段階の文化を今も持ち続けている未開人が、現在でも世界の方々にいるので、その人たちの文化や宗教（あるいはそれに代わるもの）を研究すれば、神話をまだ持っていなかった古い時代の人類の文化がどのようなものだったかが分かるという考えが、今世紀の前半というかもっとあとまで、学界で根強く信奉され続けていた。私が一九五九年にフランスに留学して、大学で受けた宗教史の講義も、後にコレージュ・ドゥ・フランスの教授になられた、碩学の旧約聖書学者が担当されていたが、完全にこのような考えに則ってされていた。

このような神話についての考え方は、現在では一言で言ってしまえば、本当にとんでもないというほかない、完全に的を外した謬見だったことが明らかになっている。

ではなぜこのような、とんでもないまちがった考え方が生じたのかと言えば、まず第一に、当時いわゆる未開人のことを研究していると自認し、世間からもそのように認められていたタイラーやフレーザー、あるいはフランスのデュルケームなどの大学者たちは、だれも実際に彼らが未開人と呼んだ人々のところに行って研究することはいっさいしなかったし、その必要もまったく認めていなかった。フレーザーにある人が、「あなたの研究しておられるオーストラリアの原住民を、現地に見に行かれてはどうですか」と尋ねたところ、彼は言下に *What for?* と反問したという、有名な逸話が伝えられている。つまり当時の大学者たちは、現地で未開人と接するのは、もっぱら探検家や、行政官、宣教師らのするべきことで、学者の仕事は、それらの人たち

が実際に接した未開人について書き送ってくる報告書の類を資料として、それらを研究し分析することであると考えていた。

フレーザーはとくに、人類学者である以前に、きわめて優れた古典学の泰斗でもあった。彼のような人々にとって学問とは、古典学者がラテン語やギリシャ語の文献を読んで、その中から自分の証明しようとしていることに役立つような証言を、見つけ出し抜き出して注釈をつけ、壮大な理論を組み立てるという、古典文献学の分野で伝統的に行われてきたやり方以外には考えられなかった。彼らはギリシア人やローマ人の書き残した資料によって、自分たちが実際には体験できぬギリシア・ローマの文化を研究するのと同じやり方で、他人がそれについて書いた資料によって未開人の文化を研究できるし、それで十分だと考えていた。

ところがそのために彼らが利用した資料には、じつは致命的な欠陥があった。それらの資料を書いた、ヨーロッパから現地に行って未開人と接触している人たちは、宣教師にしても行政官にしても、未開人はあらゆる点で自分たちよりはるかに遅れている蒙昧な人たちで、彼らの行っている宗教あるいはそれに類することは、とんでもない迷信なので、彼らをキリスト教に改宗させ、ヨーロッパの植民地行政と文化の恩沢に浴させてやるのが、自分たちの使命であると思いこみ、そのような立場から観察をしていた。つまり彼らがいかに野蛮で未開であるかを、ことさら誇張するような色眼鏡をかけた上で、未開人を見ていた。そもそも自分の文化と異なる異文化は、一般に進んでいると考えられている文化であっても、それに属していない人が自分の生れ育った文化の中で身につけた価値の尺度と意味の体系を当てはめて観察すれば、その中で日常的に行われていることの多くが、無意味で野蛮に見える。

要するに、そもそもの始めから色眼鏡で眺められ、その結果ヨーロッパ人の眼にとくに奇異で不思議で野蛮で蒙昧と思えることを好んで取り上げ、その野蛮を強調するしかたで書かれている資料の中から、自分が組み立てようとしている理論の役に立つと思われる事柄だけを取り出し、それをある人が *scissors-and-paste method of compilation by the armchair scholars at home* といみじくも呼んだやり方で、断片を書斎でつなぎ合わせてつくられたのが、当時はまさに一世を風靡したフレーザーらの大著だった。その中で当時の大学者たちが、現在でも地上の方々に現に存在している、神話も持ちえぬほど蒙昧な未開人の文化だといって描き出して見せたものは、実際には地上のどこにもそんなものは存在しないし存在したこともない、*scissors-and-paste method* で切り抜いたり貼り合わせて作られた、架空のものでしかなかった。

しかしこれこそがまさしく人類学の *Urdummheit* だったと

言わねばならぬとんでもない謬説が、一世紀以上にわたって横行していたあいだに、人類学の研究に革命的と言える変化が起こっていた。つまり学者が自身で現地に行って、いわゆる未開人と呼ばれてきた人々の中で生活しながら、彼らの文化を観察することの必要が認識されるようになった。しかもその場合に、ヨーロッパから持ちこんだヨーロッパ的価値の尺度と意味の体系に照らすのではなく、まず研究しようとする文化の中で通用している価値、概念、意味の体系を把握し、それに基づいて一々の事象を理解しようとする努力がされるようになった。

文化は言うまでもなく、それぞれがいわば一つの有機体をなしているので、その中で行われている一つひとつの習俗や制度など、各要素の持つ意味と価値は、それが全体の中でどのような位置を占め、他の要素とどういう関係にあるかという、構造的文脈を無視しては把握しえない。このことが人類学者たちによって理解され、その認識に基づいて研究が行われるようになって、人間の文化はそれぞれが、ヨーロッパの文化と単純に比較して進んでいるとか遅れているとか言っただけではけっして片がつかぬ、固有の意味と価値を持つことが明らかになった。そしてその結果、神話の研究にとって、まさに画期的と言うべき事実、つまり神話を持たぬ未開人とか文化は、実際には地上のどこにも存在しないということが明瞭になった。

では過去においてこれまで見てきたような皮相的な観察が行われたあいだ、多くの文化の中で、実際には存在していた神話がなぜ見逃され、神話も持てぬほど未開な人間とか文化という虚構が生み出されてしまったのかと言えば、その理由は次のように説明すれば分かりやすいのではないかと思われる。どの文化においても、その文化の中で行われているイデオロギーあるいは意味の体系の全体を把握していて、それを説明しうる人、それに照らしてその文化の中で実施されている一々の事柄の意味を教えることのできるイデオローグの役を果たせる人は、大勢はいない。大部分の人は自分の行っていることに、本来はどういう文化的意味と価値があるのか、理解せずにそれをしている。

たとえばわれわれが、ヨーロッパのキリスト教を研究して理解しようとして、ヨーロッパの村で聖像を拝んでいる農婦に、「なぜそんなことをするのか。その聖像にはどんな意味があるのか」と質問をすればおそらく、「子供が目の病気を患っていて、この像は眼病を治してくれる霊験あらたかな像なんです。だからこの像に触れて帰って、その手で子供の目に触ってやると目の病気が治るんです」といった類の答が、得られると想像できる。もしこのような説明をその村の方々で聞いてまわり、それによってキリスト教を理解しようとすればとうぜん、キリスト教という宗教は、聖像に触って、その手でまた子供に触れてやれば病気が治

るという類のメラネシアの原住民のマナの観念とまさにそっくりの迷信の集まりだという結論が得られる。これとほぼ近いやり方で、いわゆる未開人の文化の研究は長いあいだにわたって行われたために、その中で神話がどのような肝心な位置を占め役割を演じているかが、見逃されてきた。

どの文化でも、その文化の核心をなすイデオロギー、つまり世界観と意味の体系を表現している神話を知るためには、その文化の中で神話の全体を正確に体系として把握していて、それについて的確な説明のできる人を見つけて、その人から聞かねばならない。しかもそのような人が仮に見つかったとしても、神話に関する的確な全体的な説明は、その文化のもっとも神聖な奥義であるので、よそから来た人間に簡単に教えてよいことではない。まず自分が研究しようとする文化の中に完全にとけ込み、人々から全幅な信頼を受けてはじめて、文化の奥義である神話の実体に触れることが可能になる。フランスの人類学者マルセル・グリオールによって一九四八年に著された *Dieu d'Eau*（坂井信三・竹沢尚一郎訳『水の神』、せりか書房、一九八一年）は、西アフリカのドゴン族の持っている驚くほど豊かな神話の存在を、学界に知らせる端緒となった名著だが、この書物の中ではじめて体系的に素描された神話の存在が、オゴテメリというドゴンの賢者から彼に知らされたのは、グリオールがドゴン文化の現地調査をはじめてから十五年後のことだった。

このような研究が積み重ねられてきた結果、現在でもかつての謬見がまだ完全に払拭されてはいないが、人類の文化で神話を欠くものがないだけでなく、神話こそ各文化の核心を成す文化事象だという、過去の考えとまさに一八〇度異なる神話についての理解が、現在では神話研究者のあいだでは、次第に定着しつつあるのではないかと思われる。

現在地上に住んでいる人類はすべて、ヒト科の生物の同一の亜種ホモ・サピエンス・サピエンスに属する。このホモ・サピエンス・サピエンスが営んだ、痕跡の残されている最古の文化は、ヨーロッパで今から三万五千年ぐらい前に始まった後期旧石器文化だが、この人類最古の文化の担い手だったと言える、クロマニヨン人は明らかに、神話の中でその活動が語られるような、擬人化された偉大な神に対する信仰を持っていたことが確実だと思われる。後期旧石器時代の幕が開くとすぐに、ヨーロッパの方々で、専門家によって「先史時代のヴィーナス」と呼ばれている、女性を表わした彫像が作られることが始まった。次に述べる岩壁画と共に、人類最古の美術作品と言えるこれらの像には、きわめてはっきりした特徴がある。それは、乳房、腹、臀部、女性器など、子どもを妊娠して生んで育てる母親としての働きに肝心な女体の部位が、現実にはありえぬほど誇張されて、巨大に表わされたり、はっきりと強調されて

いることだ。当時のクロマニヨン人たちは、女性の体をあるがままの形にリアルに表現しようとすれば、そうできる能力を持っていた。そのことは岩壁画に、生態まで迫真的に描かれている、動物の表現からはっきり確かめることができる。

このことからこれらの女性像に見られる、生殖に関係する体の部位の誇張や強調が、明らかに意図的にされたものだったことが分かる。つまりこれらの像は人間の女を表わしたものではなく、妊娠し、生み、育てるという女性の母としての働きを、人間の女にはありえぬ巨大な規模で果たしている女性、つまり偉大な母神である女神を表わしていることが明らかだと思われる。

これらの像の中でもとくに有名な、オーストリアの南部のヴィレンドルフで発見された石灰石の像と、南フランスのオート・ガロンヌ県のレスピューグで発見された、マンモスの牙に彫られた像を比べてみると、どちらの像でも手と腕は、巨大な乳房の上に、乳を出そうとして押しているように置かれている。そして顔には、目鼻口などは表現されていないが、その顔はうつ向いて、乳房と腹と女性器の方にはっきり向けられている。それで目が表わされていないにもかかわらず、像によって表わされた女神は、乳房から乳を与えられ養われている子と、腹に妊娠されている子と、女性器から生まれ出る子に、慈愛の眼差しを注いでいるように見える。しかも乳房や腹、臀部などの脹らみ方の巨大さからみて、それらの子はそれぞれが一人ずつであるよりも、むしろ夥しく多数ではないかと想像できる。つまりこれらの像は、同時に多数の子を妊娠し、生み、育てるという、三重の母の働きを果たしている、女神を表わしていることが明らかだと思われる。

この女神の正体は、これもクロマニヨン人が残した美術作品である、地下の洞穴の奥の壁や天井に描かれた、いわゆる岩壁画と照らし合わせて見ることで、明らかになるのではないかと思われる。なぜならこれらの画もじつは、「先史時代のヴィーナス」の像に姿を造形されたのと同じ女神の働きを、表現したものであることが明瞭と思えるからだ。これらの画は大部分が、通行がきわめて困難で、這って通り抜けたりよじ登ったり、あるいは綱のようなものの助けを借りねば降りられぬような部分が処々にある、長い迷路のような構造を持った洞穴の奥にある、広い空間の壁や天井に描かれている。その洞穴の奥の広間のようになった場所を、当時のクロマニヨン人たちは、大地の子宮と、そしてそこに行き着くために通り抜けねばならぬ、迷路のような通路を、産道と見なしていた。そしてその産道を通り抜けてやっと行き着ける大地の子宮である空間の壁や天井に、彼らの狩の獲物となり生活の資源として欠かすことのできぬ野牛や馬などの動物の画を、今にも動き出しそうに見え

るほど迫真的に描くことで、彼らはそれらの野獣を夥しい数、地下の子宮に妊娠しては地上に生み出して、自分たちを養ってくれている、大地の母神としての働きを、感謝をこめて表現しながら崇めていたのだと思われる。

大地の産道を、危険を冒し苦労しながらやっとの思いで通り抜けて母神の子宮の内部に行き着き、そこにこのような岩壁画を描くことはクロマニヨン人にとって、もっとも大切な祭りだったに違いない。そしてその祭りを行うために台地の子宮に入ることは、万物を妊娠して生み出すその子宮に、自分たちも胎児として妊娠されることだと信じられていたと想像できる。それで画を描き終えることで祭りを終え、そのあとまた産道に見立てられた地下の暗黒の通路を通り抜け、明るい地上に出たときには、彼らは万物の母神である大地の子宮の内に充満している無限の生命力に浴し、そのことで自分たちも生命を更新されて、大地母神の子として新生したと感じ、その喜びを心の底から味わっていたのだと思われる。

そして祭りのたびにこのような神秘的体験をすることで、クロマニヨン人たちは自分たちが、狩の獲物となる獣たちとも、同じ大地母神の子であり、それだけでなく地上の生きとし生けるものすべて、さらに岩石のような生命を持たぬ自然の万物とも、大地母神を共通の母とすることで、たがいに同胞の絆で結ばれていることを、そのつど深く実感していた。それだから彼らは、狩で獲物を殺すときにも、けっしてむやみにではなく、殺される獲物と自分たちの絆を確め、いっそう深めるようなしかたでそのことをしていた。岩壁画などの美術に描かれた獲物の傷口が、女性器を象っていたり、獲物に男性器を舐めさせるのが驚くほどリアルに表されていることからは、クロマニヨン人たちが自分たちと獲物のあいだに結ばれる関係を、性的結合に擬えて意識していたことが、はっきりと窺える。

それでクロマニヨン人たちは、このような大地母神の有り難い働きと恵み、また自然の万物と自分たちが同胞であるので、共に大地を母として崇めながら、たがいに尊びあって生きて行かねばならぬことを、彼らがすでに持っていた神話の中で、はっきりと物語っていたに違いないと考えられる。今から三万五千年前まで遡る、把握できる最古の文化の中で現在の人類は、*Urdummheit* であるどころか、このような自然万物との共生を可能にする、現代のわれわれがそれに学ばねばならぬと思われる叡知を含んだ、すばらしい神話を持っていた。このわれわれが知ることのできる最古の神話と、たとえばキリスト教の教理を比較して、どちらがより進んでいるか論じることは、プラトンの哲学と現代の哲学者の思想の優劣を論じるのと同じくらい、意味の無いことではないかと思われる。

こう言えば我田引水の誹りを免れないかも知れないが私

は、このように人間の文化と不可分の関係にあり、どの文化でもまさにその真髄そのものを構成してきたと思われる神話の研究と理解が、「人文知の未来」の中で枢要な位置を占めねばならないと確信している。ところが現状では、文学部、人文学部そのほかにもさまざまな名前で呼ばれている、大学の中で人文知の研究と教育を担当しているはずの部門を見ても、日本だけでなく世界の主な大学のどこにも、そこで学生が神話の研究を専攻できる学科は設置されていない。

それではそのことを嘆いて、喫緊に方々の大学に神話学科が置かれることを願っているのかと言えば、私はそうは考えていない。それでそのことについての私の考えを説明することで、拙い話を締め括らせて頂くことにする。

私は勤務先の学習院大学文学部で、日本語日本文学科に所属しているが、この日本語日本文学科に代表されるような、伝統的に旧来の文学部を構成する柱であった学科はご存知のように、現在多くの大学でもっと目新しいさまざまな名の付けられた、いわゆる学際的な新学科に統合されて、もとの形では存在しなくなって行く傾向が見られる。だが学習院大学では文学部は相変わらず、哲学科、史学科、日本語日本文学科、英米文学科、ドイツ文学科、フランス文学科、心理学科という、古色蒼然とも見られかねなくなりつつある七学科で構成されており、少なくとも学部のレヴェルでは、近い将来にこの形を変更することは予定されていない。私自身もこの形が、学生を育てるために、現在のところもっとも望ましいと確信しており、今年の三月まで学部長を務めさせていただいたあいだ、機会があるごとにそのことを強く主張し、時流に抗してでも当分のあいだは、それを維持しようと非力を尽した。

なぜならこれらの学科にはどれも、学生にそれぞれの学問の基礎をしっかりと身に着けさせた上で、研究者となることを望む者にはそのために必要な修練をさせるための *discipline* が確立している。それでその *discipline* による訓練を徹底して受ける者を、斯学の専門家に育てられるだけでなく、それぞれの *discipline* により習得したものを土台にし、各人の能力に応じて、斯学の旧套を打破し新しい学問を創造して行く力まで身に着けさせることも、不可能ではないと思われるからだ。

それに対して方々で設置されるさまざまな目新しい名称の学科に、それぞれが教えると標榜している学を、そこに学ぶ学生に本当にきちんと習得させるため確立した *discipline* があるかと言えば、私はそのことを、少なくとも甚だ疑わしいと思っている。

「人文知の未来」は確かに、伝統的な諸学の枠組にとらわれぬ、さまざまな学際的知によって構成されることになると予想できる。だがそれらの知を創造し担う者を育てよ

うとする場合にも、大学に入学してくる学生にいきなり、まだ土台が確立しておらず、将来の見通しにも不確かなところのある新機軸の学に、いきなり取り組ませることは、一見すると早道であるように見えても、じつはそうではないのではあるまいか。古めかしく見えても *discipline* の確立されている旧来の知の分野でまず、土台となる研究の能力をしっかり涵養され、その上で新機軸にも自由に挑戦をするのが、迂遠のように見えても本当は早道なのではないかと、私は考えている。

その点から見ると神話の研究は、近代におけるその出発点となったマックス・ミュラーの論文 *Comparative Mythology* が、一八五六年に上梓されてから今日まで、一つの世代で構築された、真に壮大で一世を風靡した説が、次の世代にはまったく覆されて、また別の壮大な理論が　から新しく構築されるという、*trial and error* をくり返してきた。そのために、「人文知の未来」の枢要な部分となることが、前に述べた通りに必須だと思われるにもかかわらず、学という名で呼ばれるのに十分に価すると思える *discipline* として、確立してはいない。神話学科が日本でも世界でも大学に置かれていないことは、神話の研究のこのような現状の如実な反映と言わざるをえない。

このような現状に鑑みるなら、神話の研究を志そうとする者は、それを当初から専攻できる学科でではなく、すでに *discipline* として確立している旧来の学科で、学問の基礎を習得し、研究の出発点に立てるまでの十分な訓練を受けてから、それに取り組むのが望ましいのではないかと考えている。